

氏名	浅沼 瞳		
学位の種類	博士（看護科学）		
学位記番号	博甲第 9165 号		
学位授与年月	平成 31年 3月 25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	統合失調症者におけるリアリティ・モニタリングの特徴		
主査	筑波大学教授	博士（保健学）	水野 道代
副査	筑波大学准教授	博士（保健学）	浅野 美礼
副査	筑波大学准教授	博士（保健学）	涌水 理恵
副査	筑波大学教授	教育学博士	徳田 克己

論文の内容の要旨

浅沼瞳氏の博士学位論文は、統合失調症者におけるリアリティ・モニタリングの特徴を 2 種類の方法により検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

著者は、ある特定の記憶の情報源についての記憶・認識を指す「ソース・モニタリング」という心理学用語の下位概念であるリアリティ・モニタリングについて本研究を行っている。これまでの研究により統合失調症者は健常者よりも、記憶された情報源から記憶を引き出す際にエラーが生じやすいことが分かっていることから、統合失調症者のリアリティ・モニタリングに焦点を当ててその処理過程を調査することが試みられている。リアリティ・モニタリングは記憶の情報源が外部（自分の外界）由来か内部（個人記憶）由来かの判断過程を指している。著者は、次の 2 種類の方法により統合失調症者のリアリティ・モニタリングの特徴を導き出した。その一つは、統合失調症者が自分の病気体験をどのように記憶・認識し、またその体験記憶や認識に関連してどのような自己洞察を行っているのかをインタビュー調査により検討するというものであった。もう一つは、リアリティ・モニタリングにおいて重要な役割をなすと考えられる認知的洞察力とメタ記憶とについて測定尺度を用いて調査し、患者の病状指標等を踏まえて検討するというものであった。

【研究方法】

インタビュー調査は、関東圏内ある精神病院 1 施設の急性期病棟に入院する 20 歳以上の統合失調者のうち急性増悪期を脱した 20 名を対象に実施された。先行研究に基づいて作成されたインタビューガイドにそって半構成化面接が実施された。インタビュー内容は、内容分析の手法によりカテゴリ化が行われ、統合失調症者の病気体験に対する記憶・認識およびその記憶・認識に関連する自己洞察の内容について分類された。分析結果の妥当性は精神保健看護学を専門とする研究者 2 名との討議により検討された。

測定尺度調査は、関東圏内にある精神病院 2 施設の急性期病棟に入院する 20 歳以上の統合失調症者のうち急性増悪期を脱した 55 名を対象に実施された。認知的洞察力は日本語版ベック認知的洞察尺度（BCIS-J）を用いて測定され、メタ記憶は日本語版成人メタ記憶尺度（J-MIA-44）を用いて測定された。また調査対象者から承諾を得た上で、対象者の人口統計学的情報および医療情報

は診療録から収集され、調査時の精神症状は陽性・陰性症状評価尺度を用いて評価された。各尺度得点の集計および尺度得点と病状指標との関連について統計的に分析がなされた。

【結果】

著者は、内容分析によりインタビューデータより 144 コード、40 サブカテゴリを抽出し、さらにそのサブカテゴリから病気の体験をあらわす特徴的な記憶・認識として「病気である自己の体験」「病気を実感した体験」「病気の体験に対する客観視」「他者の影響が強い体験」「不確かな自己の体験」という 5 つのカテゴリを導き出した。またそれらの記憶・認識に関連する自己洞察としては「客観的な自己評価」「主観的な自己評価」「自己評価のゆらぎ」という 3 つのカテゴリを導き出した。

測定尺度調査における対象者の平均年齢は 48.05(SD=13.26)歳で、35 名が男性 (63.6%) で、20 名が女性 (36.4%) であった。平均入院回数は 4 回、平均罹病期間は 17.5 (SD=12.69) 年であった。抗精神病薬の服薬量は対象者間で差が大きかった。BCIS-J の下位尺度の各測定値の内的整合性を確認したところ α 係数は自己内相性が 0.59、自己確証性が 0.36 と低く、本標本では尺度得点として認知的洞察力を評価することができないことが明らかとなった。このため著者は尺度項目の得点分布を提示している。J-MIA-44 については、6 つの下位尺度の値を含め α 係数 0.69 から 0.84 の間で内的整合性が確認された。また J-MIA-44 の複数の下位尺度の平均値において入院期間の長さ (90 日を基準に 2 群を設定) による有意な差が認められ (入院期間が長い方がメタ認知機能における知識が高い一方、記憶を想起する際の不安が強い)、さらに下位尺度の一つが、抗精神病薬の内服量との間に弱い正の相関 ($r_s=0.36, p=0.003$) を示した。

【考察】

著者は、インタビュー調査の結果に基づき、統合失調症者が頭の中にある個人の記憶のような内部由来の判断過程のみでなく病気に関わる出来事等よりなる外部由来の記憶や認識を用いて情報の判断過程を進めている状況について考察し、統合失調症者が行う判別エラーへの看護師による関わり方への示唆を示した。また著者は、統合失調症者の認知的洞察はあいまいな評価を含んでおり、それを測定尺度で判定することは必ずしも容易ではないとしながら、入院期間や薬物療法とメタ認知機能との関連に関する結果から、精神科看護がなすべき重要な役割について具体的な示唆を提示した。

審査の結果の要旨

(批評)

著者は、インタビュー調査と測定尺度調査という 2 種類の方法を用いて統合失調症者におけるリアリティ・モニタリングの特徴について検討し、統合失調症者が自分の病気に関して内部由来の判断過程のみでなく外部由来の情報源による判断過程を進めている状況を説明した上で、統合失調症者の認知的洞察およびメタ認知の特徴に対応した精神保健医療における看護師の役割機能について重要な示唆を提示した。

平成 31 年 1 月 25 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士 (看護科学) の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。